大池尻遺跡

河本土地区画整理事業に伴う発掘調査

２０１７年

岡山県赤磐市教育委員会

序

本書は、平成26年度に実施した岡山県赤磐市河本地内に所在する大池尻遺跡の発掘調査成果を収載しています。大池尻遺跡は東高月丘陵の南東側斜面に位置し、砂川によって形成された平野に面した遺跡です。

この度、赤磐市河本地区において、民間事業者による土地区画整理事業が計画されました。赤磐市教育委員会では、遺跡の取り扱いについて関係者と協議を重ねてきましたが、やむなく記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査の結果、弥生時代を中心とした集落跡を確認したほか、古代山陽道の推定位置の確認調査を行うなど、貴重な成果を得ることができました。

これらの発掘調査成果を収めた本書が埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史を学ぶ上で広く役立つならば幸いです。

発掘調査の実施、報告書の作成に際しましては、赤磐市河本土地区画整理組合をはじめ関係各位ならびに土地所有者・地元の方々から多大な御支援と御協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

平成29年２月

赤磐市教育委員会
教育長　杉山　高志

例　言

1　本書は、河本土地区画整理事業に伴い、赤磐市河本土地区画整理組合と赤磐市教育委員会の委託契約に基づき、赤磐市教育委員会が実施した大池尻遺跡の発掘調査報告書である。
2　大池尻遺跡は、赤磐市河本551-2番地ほかに所在する。
3　確認調査は、平成25年11月５日～13日に、赤磐市教育委員会職員高田恭一郎・有賀祐史・畑地ひとみが行い、本発掘調査は、平成26年10月14日～平成26年12月19日に、同教育委員会職員金田善敬・有賀・畑地が担当して実施した。本発掘調査面積は188.5㎡である。
4　本書作成のための整理作業は、平成28年度に赤磐市教育委員会において行った。
5　本書の執筆・編集は、畑地が行った。
6　本書に関連する出土遺物及び図面・写真等は、赤磐市教育委員会（岡山県赤磐市下市337）に保管している。

凡　例

1　本書に用いた高度値は海抜高であり、方位は平面直角座標第Ⅴ系の座標北である。また、報告書抄録に記載した経緯度は世界測地系に準拠している。調査地の磁針方位は西偏７°25′である。
2　本書掲載の遺構・遺物の縮尺率は各図に記しているが、基本的には次のとおり統一している。
　土坑・溝断面：1/30　　調査区：1/120
　土器：1/4　　石製品：1/2　　鉄製品：1/3
3　遺物番号については、土器には番号だけを付け、石製品にはＳを、鉄製品にはＭを番号の前に付けている。
4　掲載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため径が不確実なものである。
5　土層断面図の土色は、各調査員の記述に従っており、特に統一していない。
6　図２は国土地理院発行の1/50,000地形図「和気」「岡山北部」を、図18は国土地理院発行の1/25,000地形図「金川」「万富」「岡山北部」「備前瀬戸」を複製・加筆したものである。
7　時代・時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、文化史区分・世紀を併用している。
8　本書掲載の図中の地山に付したトーンは、以下のとおりに統一している。

　地山

目　次

序
例言
凡例
目次

第１章　遺跡の位置と環境 …… 1
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 1

第２章　発掘調査の経緯と経過 …… 5
　第１節　調査に至る経緯と経過 …… 5
　第２節　報告書作成の経過 …… 7
　第３節　日誌抄 …… 7
　第４節　発掘調査及び報告書作成の体制 …… 8

第３章　発掘調査の概要 …… 9
　第１節　調査の概要 …… 9
　第２節　西区 …… 9
　第３節　東区 …… 13
　第４節　南区 …… 14
　第５節　まとめ …… 16

遺構一覧表
遺物観察表
図版
報告書抄録

図 目 次

図１　遺跡位置図（1/2,000,000）…… 1
図２　周辺主要遺跡分布図（1/50,000）…… 2
図３　調査位置図（1/1,500）…… 6
図４　Ｔ１（1/80）…… 6
図５　平成27年度工事立会断面図（1/120）…… 7
図６　西区（1/120）…… 10
図７　土坑１（1/30）・出土遺物（1/4）…… 11
図８　土坑２（1/30）…… 11
図９　土坑３（1/30）・出土遺物（1/4）…… 11
図10　土坑４（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 11
図11　土坑５・６（1/30）・出土遺物（1/4）…… 12
図12　柱穴及び遺構に伴わない遺物（1/4・1/2）…… 12
図13　東区（1/120）…… 13
図14　溝１・出土遺物（1/30・1/4）…… 14
図15　包含層等出土遺物（1/4）…… 14
図16　南区（1/120）…… 15
図17　包含層等出土遺物（1/4・1/3）…… 16
図18　調査区周辺駅路想定図（1/50,000）…… 17

表目次

表１　文化財保護法に基づく提出書類一覧…… 8
表２　遺構一覧表…… 19
表３　遺物観察表…… 19

図版目次

図版１
１　西区全景（東から）
２　土坑１（南から）
３　土坑３（南から）
図版２
１　土坑４（南から）
２　土坑５・６（南から）
３　東区全景（東から）
図版３
１　溝１（南から）
２　南区全景（南から）
３　溝２・３（北西から）
図版４
１　溝３　木材検出状況（西から）
２　溝４（西から）
３　出土遺物

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

岡山県南東部に位置する赤磐市は、県南に広がる広義での岡山平野の北東側にあたり、北の吉備高原から続く丘陵地を含む南北に細長い市域を有する。市域の東端には、県の三大河川の一つである吉井川が南流し、西側には同じく旭川が市域に近接して南流する。また、市域西部では中規模河川である砂川が南北に貫流する。これら河川やその支流に沿って大小いくつもの盆地状の平野が形成されており、丘陵と平野が入り組んだ地形となっている。丘陵地の多くは花崗岩あるいはその風化土からなるが、南部では流紋岩や泥質岩なども分布する。

図１　遺跡位置図（1/2,000,000）

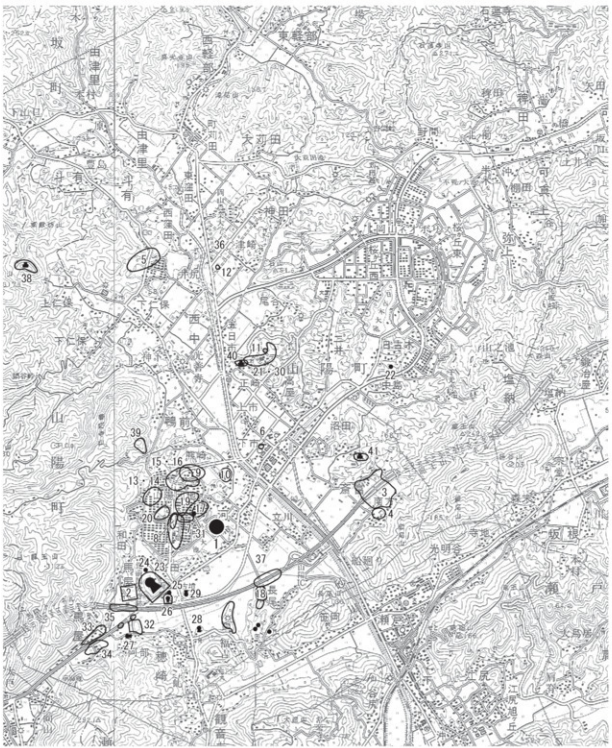
このうち砂川は、大字仁堀西の山地に源を発して花崗岩の丘陵地を通り、中流域にあたる大字町苅田から立川にかけて沖積平野を形成し、さらに平野南端の船廻りと呼ばれる山峡を通じて岡山市東区瀬戸町に注いでいる。この砂川中流域平野の規模は、東西約5.5㎞、南北約6.3㎞を測る。海抜は11～25ｍで、標高200～300ｍの山々に囲まれており、東側の丘陵は比較的低い。遺跡の多くは、この低平な沖積平野もしくは平野に面した丘陵の先端や斜面に形成されている。大池尻遺跡は、この平野の南側にあたる大字河本に所在する遺跡である。

第２節　歴史的環境

旧石器時代・縄文時代　大池尻遺跡の所在する砂川中流域の沖積平野では、これまでのところ旧石器時代の明確な遺構・遺物は確認されていない。

当該地で確認されている最も古い時期の遺物は、縄文時代草創期の有舌尖頭器である。これは備前国分寺跡（２）の奈良時代以降の包含層から出土した遺物である。斎富遺跡（３）からは後・晩期の土器と軟玉製丸玉が出土した。晩期の南方前池遺跡（４）では、堅果類を貯蔵した貯蔵穴がまとまって検出されており、当時の食生活を知る上で貴重な遺跡である。さらに吉原遺跡（５）からは晩期の石棒が出土している。

弥生時代　前期の土器は、南方前池遺跡と山陽小学校遺跡（６）から出土しており、人々の沖積平野への進出を物語る資料と考えられる。また中期以降の遺跡は各所で確認されており、中でも大池尻遺跡の北西側、東高月丘陵に営まれた中期後半の用木山遺跡（７）・惣図遺跡（８）・門前池遺跡（９）等の集落遺跡群は、卓越した遺構密度と遺物量から当地域の拠点集落の一つと考えられる。これらの



1　大池尻遺跡
2　備前国分寺跡
3　斎宮遺跡
4　南方前池遺跡
5　吉原遺跡
6　山陽小学校遺跡
7　用木山遺跡
8　塾図遺跡
9　門前池遺跡
10　門前池東方遺跡
11　浦山遺跡
12　丸田遺跡
13　四辻峠方形台状墓
14　四辻土壙墓遺跡
15　便木山方形台状墓
16　便木山遺跡
17　愛宕山土壙墓遺跡
18　着測遺跡
19　用木古墳群
20　野山古墳群
21　正崎４号墳
22　中島１号墳
23　両宮山古墳
24　和田茶臼山古墳
25　正免東古墳
26　森山古墳
27　朱千駄古墳
28　小山古墳
29　廻り山古墳
30　正崎２号墳
31　岩田14号墳
32　備前国分尼寺跡
33　高月駅家推定地
34　馬屋森向遺跡
35　馬屋遺跡
36　西山高陽条里遺構
37　高月条里遺構
38　易木城跡
39　善応寺城跡
40　正崎城跡
41　沼田城跡

図２　周辺主要遺跡分布図（1/50,000）

遺跡は平野に面した丘陵の尾根や斜面などにあり、中期中葉から後期初頭のその他の集落も比較的高所へ立地するものが多い。続く後期の遺跡は、谷口や山裾の微高地などに立地する大規模な集落跡が多くなる。中期から続く門前池遺跡のほか、門前池東方遺跡（10）、斎富遺跡、浦山遺跡（11）が確認されている。また平野部では、旧河道により形成された自然堤防上の集落の存在も知られ、後期前半の丸田遺跡（12）がある。

墳墓については、東高月丘陵に築かれた中期の四辻峠方形台状墓（13）と四辻土壙墓遺跡（14）、後期の便木山方形台状墓（15）と便木山遺跡（16）、愛宕山土壙墓遺跡（17）がある。このうち便木山遺跡では、木棺墓群の中に築かれた特殊器台・壺を伴う小規模な弥生墳丘墓がある。

古墳時代　集落遺跡は、東高月丘陵の門前池遺跡や着鋼遺跡（18）、斎富遺跡がある。斎富遺跡は、丘陵の裾部から広がる扇状地状の平野に位置する集落跡で、大量の鉄滓や羽口、鉄鉱石等の出土のほか、陶質土器や軟質系土器など朝鮮半島系遺物が出土し、朝鮮半島からの人の移動や移住が想定される。中期後半以降、竪穴住居や掘立柱建物等の著しい増加が認められるなど、当地域の古墳形成との関わりが注目される。

前期古墳は、東高月丘陵では用木１号墳、同３号墳と首長墓系譜が続く用木古墳群（19）、小規模な方・円墳で形成される前～中期の野山古墳群（20）が形成されている。発掘調査が行われた古墳としては、正崎４号墳（21）や中島１号墳（22）がある。

中期後半から後期前半には、墳長206mを測る巨大な前方後円墳の両宮山古墳（23）と、その周辺に中規模前方後円墳が集中して築かれるなど、卓越した様相を呈する。二重周濠を有する両宮山古墳に近接して、同じく二重周濠を有する和田茶臼山古墳（24）と正免東古墳（25）、森山古墳（26）が築造された。中期末から後期初頭には、朱千駄古墳（27）、小山古墳（28）が、後期前半には廻り山古墳（29）が築かれている。その他、発掘調査が行われた古墳として中期後半の正崎２号墳（30）がある。

後期後半には東高月丘陵に横穴式石室をもつ円墳、岩田14号墳（31）が築かれる。その石室規模や豊富な副葬品から有力首長墓と考えられる。

古代　奈良時代には、両宮山古墳の西側に隣接して備前国分寺跡、その南側に備前国分尼寺跡（32）が造営される。古代山陽道は岡山市北区牟佐からこの両寺院の間を抜け、大池尻遺跡の南側を通って赤磐市日古木へと東西に通っていた可能性が高く、古代備前国における陸路の枢要を高月駅家推定地（33）が担っていたものと考えられる。高月駅家周辺に位置する馬屋森向遺跡（34）では、平安時代以前の古道と推測される遺構が検出され、平城宮式の１点を除くすべての軒丸瓦が備前国分寺の創建瓦と同文である。また、奈良時代から室町時代前半期を中心とする建物群を検出した馬屋遺跡（35）がある。

この地域の平野部には現在でも整然とした条里地割が残る。これら西山高陽条里遺構（36）や高月条里遺構（37）の地割がいつ施行されたものかは判然としていない。古代においてこの地域一帯は赤坂郡高月郷・鳥取郷にあたり、鳥取郷は平安時代末に在地領主である葛木氏により鳥取荘として開発され、長講堂領の荘園となった。

中世　戦国時代には、遠藤氏が鳥取荘を本領としており、浦上政宗に仕えた後、宇喜多直家、そして岡山藩主池田忠雄に仕えた。戦国時代の備前国の支配権争いにおいて、鳥取荘のあるこの地域は備前中南部における重要な地域であった。中世山城として、葛木城跡（38）、善応寺城跡（39）、正崎城跡（40）、沼田城跡（41）などが知られている。

引用・参考文献

有賀祐史ほか2013「向山宮岡遺跡 丸田遺跡 中屋遺跡の大量出土銭」赤磐市文化財調査報告第６集　赤磐市教育委員会
伊藤晃ほか1995「松尾古墳群 斎富古墳群 馬屋遺跡ほか」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告99　岡山県教育委員会
宇垣匡雅2004「森山古墳 両宮山古墳」山陽町文化財調査報告第２集　山陽町教育委員会
宇垣匡雅2005「両宮山古墳」赤磐市文化財調査報告第１集　赤磐市教育委員会
宇垣匡雅2008「史跡両宮山古墳中堤保存工事報告書」赤磐市文化財調査報告第２集　赤磐市教育委員会
宇垣匡雅ほか2009「備前国分寺跡」赤磐市文化財調査報告第３集　赤磐市教育委員会
岸田裕之1995「浦上政宗支配下の備前国衆と鳥取荘の遠藤氏」『岡山県地域の戦国時代史研究』広島大学文学部紀要55-2
神原英朗1971～1977「岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報」１・２・４　山陽町教育委員会
下澤公明ほか1996「斎富遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告105　岡山県教育委員会
高田恭一郎ほか2014「着鋼遺跡」赤磐市文化財調査報告第７集　赤磐市教育委員会
則武忠直ほか1986「山陽町史」山陽町
則武忠直ほか2004「正崎２号墳」山陽町文化財調査報告第１集　山陽町教育委員会

第２章　発掘調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と経過

１　発掘調査の契機

赤磐市河本地区は、仮称）河本土地区画整理組合設立準備委員会による土地区画整備事業が計画されていた地区である。平成25年８月、赤磐市教育委員会は事業予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについての協議を受けた。当該予定地には、周知の埋蔵文化財包蔵地である山陽町№351散布地が含まれていることから、事前に確認調査を行い、遺跡の内容や範囲を把握した上でその対応について協議することとした。

この協議に基づき、平成25年度に実施した確認調査の内容の詳細は次項に述べるとおりである。確認調査により、事業予定地内の北側で遺構の広がりが認められたことから、山陽町№351散布地（確認調査後、大池尻遺跡と名称変更）の当該箇所の対応について事業者と協議を重ねた。協議の結果、道路拡張部分において現状での保存が困難であることから、平成26年度に本発掘調査を実施することになった。

平成26年８月、事業者から文化財保護法第93条に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出され、岡山県教育委員会教育長から工事着手前に発掘調査を実施する旨の通知がなされた。平成26年９月12日、事業者と赤磐市教育委員会教育長は発掘調査に関する覚書を締結し、平成26年11月から赤磐市教育委員会により発掘調査に着手する運びとなった。

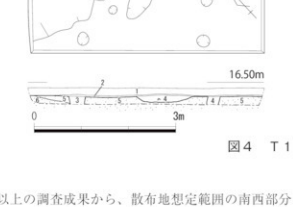
２　確認調査

現在山陽団地として造成されている東高月丘陵の南東側斜面に面する事業対象地には山陽町№351散布地が広がり、事業対象地の北東側には山陽町№350散布地が近接している。これらの遺跡の広がりと残存状況を把握するため、平成25年11月５日から13日に確認調査を実施した。調査前の対象地は畑地や果樹園として利用されており、現地形を考慮してトレンチ７か所の計画で調査に着手した。調査の過程で遺構の広がりを確認するためにトレンチを２か所追加し、調査を実施したトレンチは合計９か所となった。

調査の結果、散布地東側に設定したＴ１において遺構を検出した。Ｔ１では、表土からの深さ0.15ｍで基盤層となり、柱穴６基、溝１条、たわみ状の遺構１基を検出した。出土遺物として弥生土器・須恵器が認められ、遺構の時期は弥生時代から古墳時代と考えられる。

Ｔ８・９では弥生時代から古墳時代の遺物包含層を確認した。なお、岩田大池から北東方向に延びる谷に設定したＴ３・４及び低位部のＴ２では遺構は認められなかった。Ｔ５は山陽団地内のさくら山遺跡が所在する丘陵と、愛宕山遺跡の所在する丘陵によって形成される谷地形であったと判断した。Ｔ６・７も地山直上まで砂層堆積が認められたため、自然流路の可能性がある。

図３　調査位置図（1/1,500）



1　現代水田耕作土
2　現代水田床土
3　暗渠
4　黒褐色土（弥生土器～須恵器含む）
5　褐灰色土（細砂～粗砂多く含む、しまりなし、部分的にMn沈着し固くなる）
6　明黄褐色土（Mn粒多く含む、固い）

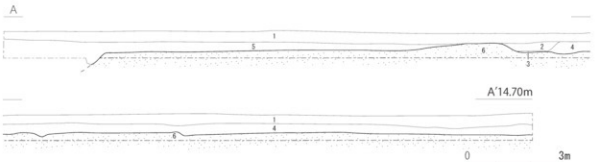
図４　Ｔ１（1/80）

以上の調査成果から、散布地想定範囲の南西部分は谷地形であり、遺跡が広がっていないと判断した。そこで、散布地は主に南東向き緩斜面とその裾部を中心とする範囲と推定し、小字から遺跡名称を大池尻遺跡とした。遺構を検出したＴ１周辺に計画された道路拡幅範囲について記録保存発掘調査の対象とした。

３　本発掘調査の経過

平成25年度の確認調査の成果を受け、整備事業内の道路拡幅範囲を対象に本発掘調査を実施した。また、大池尻遺跡の南側には古代山陽道が東西に延びていたと推定されている。そこで、古代山陽道の有無を確認するために当該遺跡の南側でも調査を行った。期間は平成26年10月14日から12月19日までの２か月間、対象面積は188.5㎡、担当職員は３名である。

調査前の対象地の地形は、耕作地の造成によって、段状に削平されている状況であった。調査は、現代耕作土と造成土を重機で除去したのち、弥生時代から古代を中心とした包含層を人力で掘り下げ



1　耕作土
2　黄灰色粘性砂質土（土坑埋土）
3　黒褐色粘質土（土坑埋土）
4　黄灰色砂質土（流土、しまり弱い）
5　灰色砂質土（谷埋土、しまり弱い、下位に暗褐色粘質土含む）
6　黄色粘質土（地山）

図５　平成27年度工事立会断面図（1/120）

た。遺構の検出は、東区で標高16.0～16.3m付近、西区西端側で標高17.0m付近である。一方南区では、調査区北側では標高16.4m、南側では標高15.5mで地山を検出した。南区の中央部は谷地形になっており、谷の中心に向かって南北から深く落ち込む状況であったため、地山を検出していない。

なお、事業対象地の南東端も北西方向へ長さ約35.4mに渡って擁壁の掘削工事が行われたが、面積狭小のため平成27年12月24日に工事立会で対応した。南区の北東側に当たる当地点では標高13.5m付近で地山面を検出した。掘削範囲の北側で、南区と同様の谷の落ちを確認したが、明確な遺構は確認できなかった。

第２節　報告書作成の経過

平成28年４月１日、事業者と赤磐市教育委員会教育長は報告書作成に関する委託契約を締結した。

遺物整理は、遺物洗浄、土器の復元、遺物の抽出、実測に続き、浄写作業及び写真撮影を実施した。

遺構整理は、実測図の検討を行った上で下図を作成して浄写を行った。発掘調査時の所見及び出土遺物の検討から近代以降に属する遺構については不掲載とした。掲載遺構は土坑６基、溝４条である。

その後、これらをもとに全体の割付作業や原稿作成、編集作業を行った。

第３節　日誌抄

（確認調査）

平成25年 11月５日（火）資材搬入、調査開始
　　11月13日（水）資材撤収、調査完了

（本発掘調査）

平成26年 10月14日（火）資材搬入、東区調査開始
　　10月31日（金）東区調査完了、西区調査開始
　　12月９日（火）西区調査完了、南区調査開始
　　12月18日（木）南区調査完了
　　12月19日（金）資材撤収

（報告書作成）

平成28年 ４月１日（金）報告書作成開始

平成29年 ２月28日（火）報告書発行

第４節　発掘調査及び報告書作成の体制

赤磐市教育委員会

教 育 長	永島　英夫（～平成26年２月）
	杉山　高志（平成26年３月～）
教育次長	宮岡　秀樹（～平成26年３月）
	奥田　智明（平成26年４月～）
（社会教育課）	
課　　長	正好　尚昭（～平成26年３月）
	前田　正之（平成26年４月～平成28年３月）
	土井　道夫（平成28年４月～）
副 参 事（文化財班長）	高田恭一郎（確認調査）
	金田　善敬（本発掘調査）
主　　査	有賀　祐史（確認調査・本発掘調査）
嘱　　託	畑地ひとみ（確認調査・本発掘調査・報告書担当）

表１　文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財確認調査の報告

文書番号 日付	周知・ 周知外	遺跡の種類 及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地 の有無	報告者	担当者	期間
赤教社 第633号 H25.11.25	周知	集落跡 大池尻遺跡	赤磐市河本551-2 ほか	67	土地区画整理	有	赤磐市教育委員会 教育長　永島英夫	高田恭一郎 有賀祐史 畑地ひとみ	H25.11.5～ H25.11.13

埋蔵文化財発掘の届出（法第93条）

岡山県文書番号 日付	遺跡の種類及び名称	所在地	面積（㎡）	目的	届出者	期間	主な指示事項
教文理 第610号 H26.8.4	集落跡 大池尻遺跡	赤磐市河本551-2ほか	31,370	土地区画整理	事業者	H27.4.1～ H28.6.30	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

文書番号 日付	遺跡の種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期間
赤教社 第494号 H26.10.16	集落跡 大池尻遺跡	赤磐市河本551-2ほか	230	土地区画整理	赤磐市教育委員会 教育長　杉山高志	金田善敬 有賀祐史 畑地ひとみ	H26.10.14～ H26.12.22

遺物発見通知・文化財認定（法第100条・第102条）

岡山県文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地 所有者	現保管場所
教文理 第1119号 H25.12.27	弥生土器、須恵器ほか 計整理箱１箱	赤磐市河本551-2ほか （山陽町351）	H25.11.5～ H25.11.13	赤磐市教育委員会 教育長　永島英夫	個人 ７名	赤磐市山陽郷土資料館
教文理 第1154号 H26.12.24	弥生土器、須恵器ほか 計整理箱４箱	赤磐市河本551-2ほか （大池尻遺跡）	H26.10.14～ H26.12.19	赤磐市教育委員会 教育長　杉山高志	個人 ５名	赤磐市山陽郷土資料館

第３章　発掘調査の概要

第１節　調査の概要

調査地は、東高月丘陵の南東側にあたる緩斜面で、標高約16.4～17.5mの範囲に位置する。調査区は遺跡の北東端から中央付近へ一連に設定した東区、西区と、遺跡推定範囲の南側を通る古代山陽道の推定位置に当たる南区に分けている。

弥生時代の遺構は西区を中心に、古代の遺構は西区・東区で確認した。本書に掲載した遺構は、弥生時代の土坑６基、古代まで続く溝１条、時期不明だが、道を形成する可能性のある溝３条である。柱穴は時期を特定するのは困難だが、弥生時代よりも新しい時期の遺物を含む柱穴も確認できた。

第２節　西区

概要（図６、図版１－１）

西区は南西から北東に延びる市道に沿って設定した24×３mの細長い調査区である。耕作地として利用されており、調査区の西側で比高差50cm程度の段状に掘削されている。第１層は造成土、第２・３層は耕作土、第４～17層は耕作地に伴う造成土である。第10～12層を埋土とする東端部の溝は、第12層からビニール片が出土したため、耕作地に伴う溝と判断し、図化していない。

遺構は土坑６基の他、多数の柱穴を地山面で検出した。土坑をはじめ多くの柱穴は黒褐色の似通った埋土であった。これらの遺構の多くは弥生土器を伴っており、土器の時期から弥生時代後期の遺構と考えられる。一方、異なる埋土を持つ柱穴も数基確認しており、土師質土器や須恵器等を検出した。遺物は小片のため時期を特定するのは困難であるが、新しいものは鎌倉時代まで下る可能性がある。

土坑１（図７、図版１－２）

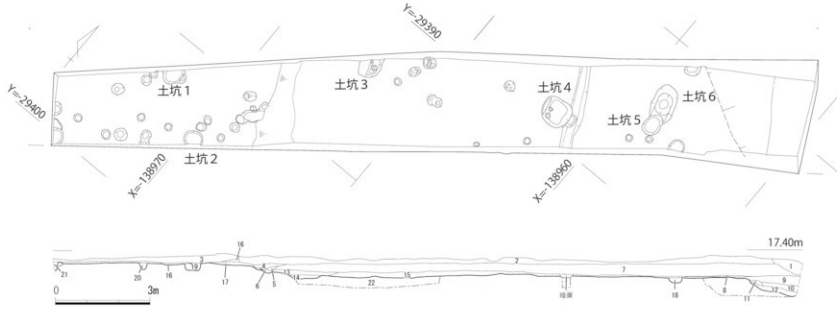
調査区西側で検出した。土坑は調査区外に広がっており、現状では長軸82cm、深さ31cm、平面は楕円形である。壁は緩やかに立ち上がり、逆台形の断面を呈す。土坑からは弥生土器の小片が出土しており、壺もしくは甕の口縁部１を図示した。出土土器から、時期は弥生時代後期と考える。

土坑２（図８）

調査区西側、土坑１の南東側に位置する土坑である。調査区外に広がっており、現状では長辺61cm、平面は楕円形である。深さは22cm、逆台形の断面を呈す。埋土は１層で、弥生土器片が出土しているが、小片のため図化し得なかった。時期は弥生時代後期の範疇であろう。

土坑３（図９、図版１－３）

調査区の中央部で検出した土坑である。調査区外に広がっており、現状では長辺68cm、深さ17cmを測る。平面・断面ともに形が整っていないため、複数の土坑・柱穴が重なっている可能性も考えられるが、埋土は分層し得なかった。弥生土器片が複数出土しており、甕２・３、高杯４、器台５を図化した。時期は弥生時代後期と考える。



1　造成土
2　耕作土
3　耕作土
4　灰黄褐色砂質土（5mm程度小礫含む、Fe 沈着）
5　褐灰色砂質土（5mm程度小礫含む）
6　褐灰色砂質土（5～10cm程度礫稀に含む）
7　褐灰色砂質土（5mm程度礫含む、Fe 沈着）
8　灰白色砂質土（Fe 沈着、しまり弱い）
9　褐灰色砂質土（Mn 沈着、しまりやや強い）
10　褐灰色砂質土（5mm程度小礫含む、灰白色・黄色ブロック混）
11　赤灰色砂質土（砂質強い）
12　青灰色粘質土（黄色ブロック混、現代遺物含む）
13　褐灰色砂質土（Mn 含む、稀に黄色ブロック含む）
14　暗灰黄色砂質土（砂質強い、しまり弱い、5mm大礫含む）
15　褐灰色砂質土（Mn 含む）
16　褐灰色砂質土（Fe 沈着、しまり・粘性弱い）
17　明褐灰色砂質土（Fe 沈着、Mn 多く含む、砂質強い）
18　黒褐色土（土器細片含む）柱穴埋土
19　黒褐色土（土器片含む）土坑２埋土
20　黒褐色土（土器片含む）柱穴埋土
21　黒褐色土（炭粒・土器片含む）柱穴埋土
22　黄色混暗灰黄色粘性砂質土（黄色ブロック・粗砂含む）地山

図６　西区（1/120）

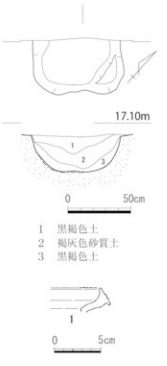


図７　土坑１（1/30）
・出土遺物（1/4）

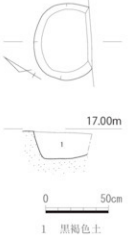


図８　土坑２（1/30）

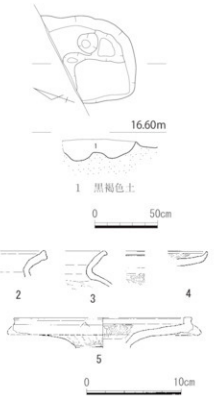


図９　土坑３（1/30）・出土遺物（1/4）

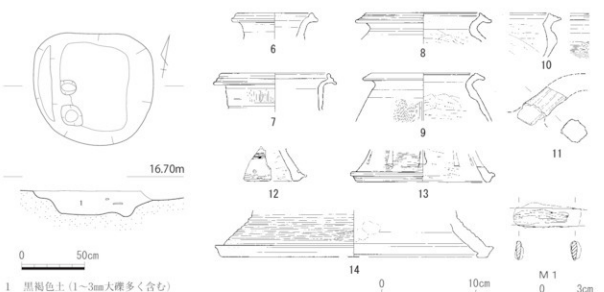


図10　土坑４（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

土坑４（図10、図版２－１・４－３）

調査区中央部で検出した土坑で、北東側の上面が後世の暗渠によって削平されている。長辺95㎝、短辺88㎝を測り、平面は隅丸方形を呈する。深さは21㎝で、断面は南側に段を持ち、北側の壁は緩やかに立ち上がる。埋土は１層で、土器片が出土している。遺物は弥生土器壺６・７、甕８・９、鉢10、把手？11、高杯12・13、器台14、刀子？Ｍ１である。時期は弥生時代中期末から後期前半と考える。

土坑５・６（図11、図版２－２・４－３）

土坑５は調査区の東側、土坑４の北東に位置する土坑である。長辺は現状で72cm、短辺54cm、深さ25cm、平面は楕円形で、断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色土で、１㎜以下の砂粒を多く含み、サヌカイトも小片ではあるが多数含む。弥生土器片も出土しており、壺？15、甕16・17を図化した。甕

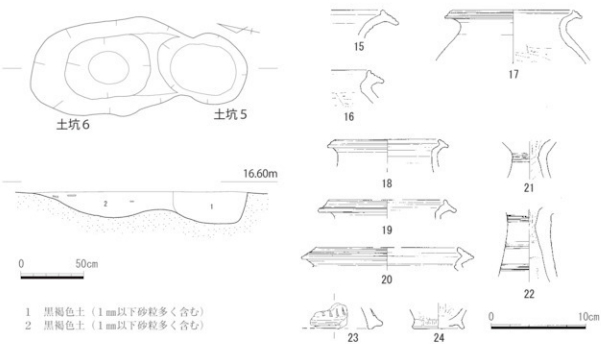


図11　土坑５・６（1/30）・出土遺物（1/4）

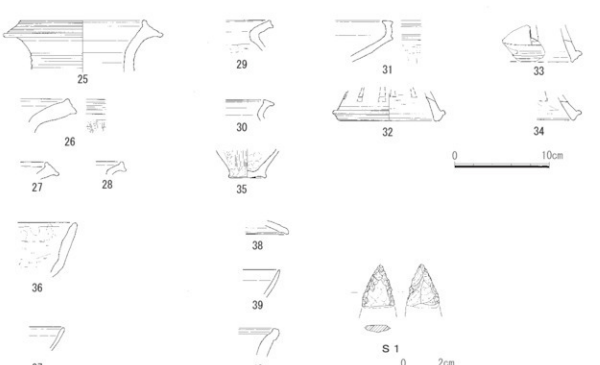


図12　柱穴及び遺構に伴わない遺物（1/4・1/2）

の口縁部17は東側の壁に張り付くような形で出土している。

土坑６は調査区の東側に位置し、南側の土坑５と切り合い関係にある土坑である。長辺は現状で110cm、短辺74cm、平面は楕円形を呈す。壁の立ち上がりは緩やかで、上部で傾斜変換を伴う椀形の断面形である。埋土は土坑５よりもやや明るめの黒褐色土である。土質はよく似ており、サヌカイトの小片を多く検出した。出土遺物として弥生土器壺18・19、甕20、高杯21・22・23、手捏ね土器24を図化した。甕20・高杯22は東側の壁に張り付くような状況で出土した。

土坑５は土坑６よりも新しいものの、遺物から明確な時期差を認めがたく、両遺構とも弥生時代後期前半に埋没したものと考える。

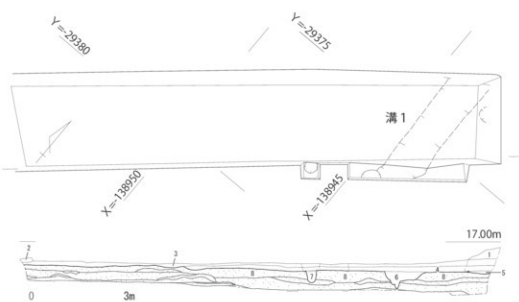
柱穴及び遺構に伴わない遺物（図12、図版４－３）

柱穴から出土した土器を中心に掲載した。弥生土器は壺25・26、壺もしくは甕27・28、甕29・30、高杯31～34、甕の底部35である。手捏ね土器36、土師質土器椀37、須恵器は杯蓋38、杯もしくは椀39、甕40である。Ｓ１はサヌカイト製の石鏃である。

第３節　東区

概要（図13、図版２－３）

東区は西区の東側に隣接しており、16×３ｍの南西から北東に延びた調査区である。第１層は造成土、第２・３層は耕作土、第４層は客土である。第５層は遺物包含層だが、耕作地の造成によって削平を受けており、調査区東側で一部残っているのみである。



1　造成土
2　耕作土
3　旧耕作土
4　灰褐色粘質土（Mn 含む、土器細片・0.5～３mm大白色礫含む、砂質あり）
5　暗褐色粘質土（土器片・炭粒含む）包含層
6　黒褐色粘質土（３mm程度白色礫・土器片含む、砂質あり）
7　黒褐色粘質土（３mm程度白色礫・土器片含む、砂質あり）
8　褐色粘性砂質土（黄色ブロックをまれに含む、しまり強い）地山

図13　東区（1/120）

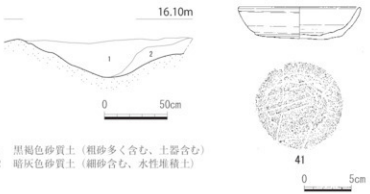


図14　溝１・出土遺物（1/30・1/4）

図15　包含層等出土遺物（1/4）

遺構は弥生時代から古代にかけての溝１条と柱穴を検出した。柱穴は遺物を伴っていないため、時期を特定できなかった。なお、調査区北西隅で土坑１基を確認したが、第５層が削平を受けた後に掘られた近代以降の土坑と判断し、図化していない。

溝１（図14、図版３－１・４－３）

調査区の東端部に位置し、南北に延びる溝である。現状では、北端側で上端幅134cm、底面幅24cm、深さ30cmを測る。壁の傾斜は緩く椀形の断面を呈す。埋土は２層の砂質土で、出土遺物の土師器杯41を図化した。41は底部にヘラ切りが施されており、12世紀代のものと考える。よって溝１は古代に使用されていた溝と推測する。

包含層等出土の遺物（図15）

調査区からは弥生時代から古代を中心とする遺物が出土している。遺物は小片が多く、図化できたのは弥生土器の壺42と高杯の脚部43のみである。

第４節　南区

概要（図16、図版３－２）

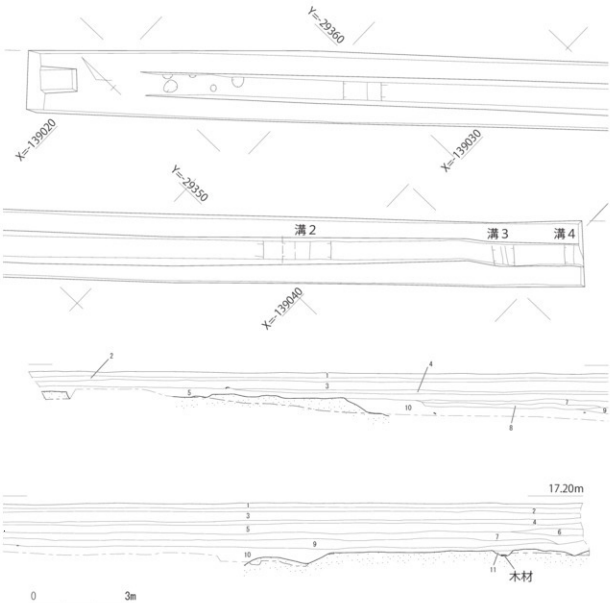
西・東区の南側、古代山陽道の有無を確認するために設定した調査区である。調査規模は36.8×２m、北西から南東に延びた調査区である。第１～４層は耕作土ないし床土、第５～10層は遺物包含層である。調査区の中央部は谷地形になっており、地山は調査区の北側と南側から中央部に向かって深く落ち込む状況であったため、調査区中央部では地山を検出し得なかった。

遺構は地山上面で溝３条と柱穴を検出した。谷部の北側で検出した柱穴は、時期の特定には至っていないが、西・東区で確認した遺構と一連のものと推測される。西区を中心とする集落は谷部周縁まで南に広がっていたのであろう。また、谷部の南側では東西方向の溝３条を検出した。

溝２～４（図版３－３～４－２）

溝２は谷部の南側の落ちから60cm南側を東西方向に延びる溝で、上端幅160cm、底面幅40cm、深さ34cmを測る。谷部の落ちに続く北側の壁が緩やかな傾斜になっており、椀形の断面形を呈す。埋土は地山上面に堆積する包含層と一連の土層である。

溝３は溝２の5.1m南側に位置する東西方向の溝である。上端幅66cm、底面幅16cm、深さ19cmを測り、



1　耕作土
2　床土
3　旧耕作土
4　旧床土
5　褐灰色粘性砂質土（しまり弱い、粘性あり、土器含む、５㎜大砂礫多く含む）包含層
6　灰褐色砂質土（しまり弱い、粘性なし）
7　灰赤色粘性砂質土（しまり弱い、粘性あり、土器含む、１～３㎜大砂礫多く含む）包含層
8　黄灰色粘性砂質土（しまり弱い、粘性ややあり、土器含む、１～３㎜大砂礫多く含む）包含層
9　褐灰色粘性砂質土（しまり弱い、粘性ややあり、土器含む、１～３㎜大の砂礫多く含む）包含層
10　黒褐色粘質土（しまり弱い、粘性あり、土器含む、１～３㎜大砂礫多く含む）包含層
11　灰黄色砂質土（しまり弱い、木材含む）

図16　南区（1/120）

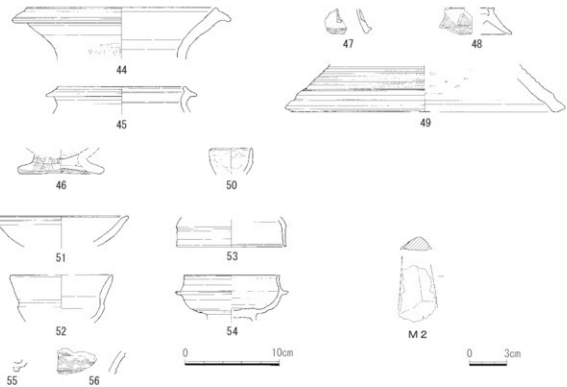


図17　包含層等出土遺物（1/4・1/3）

断面は逆台形を呈す。埋土は１層、底面で木材を検出した。木材は幅８cm、厚さ４cm程度の板材で、底面に敷かれた状態であった。

溝４は溝３の1.6m南側に位置する東西方向の溝である。上端幅は現状で80cm、底部幅12cm、深さ16cmを測り、断面は椀形を呈す。埋土は地山上面に堆積する包含層と一連の土層である。

溝２から溝４までの間は、谷へと続く自然地形を削平して平坦面が形成されている。掘削の時期は不明ではあるが、この溝に挟まれた範囲に古代山陽道があったが上面を掘削されてしまったという可能性も考えられる。ただし、溝は３条とも出土遺物がないため時期不明であり、道の痕跡と考えられる遺構も確認していないため、想像の域を出るものではない。

包含層等出土の遺物（図17、図版４－３）

包含層等出土の土器として、弥生土器の壺44、甕45、台付鉢46、高杯47、器台48・49、ミニチュア土器50、土師器の椀51、坩52、須恵器の杯蓋53、有蓋高杯54、杯55、鍋？56、不明鉄器Ｍ２を掲載した。

第５節　まとめ

今回の調査によって、大池尻遺跡における弥生時代以降の状況の一端が明らかとなった。耕作地の造成によって土地改変を受けているものの、発掘調査の状況から、谷地形の南東向き緩斜面上に弥生時代から古代にかけて遺構が形成されていたことが確認できた。

弥生時代では、土坑６基と柱穴を確認した。遺構の広がりは谷部の北側縁辺まで続いており、時期は中期末から後期前半を中心とするものと考える。大池尻遺跡の北西側、東高月丘陵上で用木山遺跡

図18　調査区周辺駅路想定図（1/50,000）

や門前池遺跡などの集落が営まれている時期に、今回確認した遺構は希薄ではあるものの、丘陵の裾部でも集落が営まれていた状況が明らかとなった。

古墳時代の明確な遺構は本調査では確認できなかった。しかしながら、確認調査時に弥生時代から古墳時代にかけての溝・たわみ状遺構を確認している点、包含層から小片ながら古墳時代の遺物が出土している点などから、周辺で人々の活動があったものと考える。

古代の遺構として溝１条を調査区の東側で確認した。

谷を挟んで南側では、丘陵を削平して形成された平坦面と溝３条を確認した。これらの遺構の時期や性格を特定するには至らなかったが、珂磨駅と高月駅とを繋ぐ古代山陽道の想定範囲に位置しているため、古代山陽道との関係について検討してみたい。

古代山陽道は都から大宰府までをつなぐ大路である。『類聚三代格』の大同二年（807）の記述から、備前国内には駅家が坂長駅、珂磨駅、高月駅、津高駅の４駅が設置されたていたことが明らかになっている。珂磨駅と高月駅をつなぐ駅路は、一般的に可真から日古木峠を抜け、下市を通過して高月駅へと至るルートで想定されている。この道筋の特に調査区周辺部について、今回の調査成果を踏まえて確認してみる。

図18は調査区周辺の地図に、山陽団地等の改変前の地形と遺跡等を加筆したものである。高月駅は、平安時代以前の古道が確認された馬屋森向遺跡の北側に想定されている。駅路はこの高月駅の南側を東へ、備前国分寺と国分尼寺との間を抜けて通っていたものと考えられている。仮に備前国分寺よりも北側へ進路をとるとすると山にぶつかってしまい、備前国分尼寺の南側を進むとすると条里を切っ

て道を造らねばならない。また、駅路は直線への志向性が高いことが古くから指摘されており、牟佐から山あいを抜けて直線で進むのに支障のない道筋を想定すると、自ずとこの２つの寺院の間となる。この直線道路は両宮山古墳・森山古墳・正免東古墳のいずれかにぶつかることになるが、古墳を切って道が通っていた痕跡は現状では認められない。よって、駅路は高月駅から備前国分寺・国分尼寺の間を抜けて東へ直進し、両宮山古墳と森山古墳・正免東古墳の間で古墳を避けて屈折し、東へと延びていたと想定できる。

両宮山古墳の前からは、岩田大池の南東側にある小丘陵の南側を通る道筋と、小丘陵の北側と池との間を抜ける道筋が想定できる。しかしながら、小丘陵の南側に道筋をとった場合、条里に沿って折れ、北側を抜ける直線路と合流する道筋になるため、曲がる回数と距離の増加を考えると望ましい道筋ではない。さらに足利健亮によると、岩田大池の南側に位置する小丘陵の南側一帯は長い間沼沢をなす低湿地で、条里遺構もなく、東西交通の障害をなす地帯でもあったという（足利1985）。よって、小丘陵の北側を通っていたと考えるのが妥当であろう。

小丘陵の北側を直線に抜ける道筋を想定したとき、駅路は南区周辺を通ることとなる。今回の調査では、駅路を確認できなかったことは前述の通りであるが、南区中央部で谷地形を確認している。谷の深さは不明だが、東側擁壁の確認調査位置まで南西から北東に谷の南側上端が延びることを確認している。岩田大池からこの谷の北側へ進路をとってしまうと、東高月丘陵に沿って北上する他ない。一般的な想定ルートに戻るためには谷を再び越えねばならず、新たに直線の駅路を設定するのは困難である。そのため、駅路は今回確認した谷の傾斜変換点を北限とし、この谷を越えて北には通らないものと考えられる。この谷の丘陵斜面を掘り下げて造成した平坦面と溝は、古代山陽道の時代に存在したのであれば、駅路との関係性が大いに考えられる遺構ではあるが、時期と性格が明らかになっていない現状では言及することはできない。

調査地の東側には下市地区がある。この付近には中世の頃に市場があったとされており、また砂川の氾濫の影響を受けてか、条里の痕跡は不明瞭である。この下市地区を通過し中島までは、両宮山古墳からほぼ直線でつなぐことが可能である。中島からは、山の地形に沿って日古木の峠を越えていく道を採る他にない。峠からさらに東に抜け、珂磨駅まで駅路は続いていたのであろう。

調査区で確認した谷地形の南側が想定される駅路の北限であり、これまでも提唱されてきた岩田大池と丘陵の間を通る道筋が最も妥当であること再確認した。今回の調査は部分的なものであり、駅路を確認することはできなかったが、今後の発掘調査の進展を待って検討していきたい。

【参考・引用文献】

足利健亮　1985「吉備地方の古代山陽道の駅路の復元」『日本古代地理研究』大明堂
大橋雅也　2006「備前・備中における古代山陽道と駅家」『畿内弥生社会像の再検討・「雄略朝」期と吉備地域・古代山陽道をめぐる諸問題』シンポジウム記録５　考古学研究会
妹尾周三　2015「瓦から見た古代山陽道の駅家」『考古学ジャーナル』665　ニューサイエンス社
高橋美久二　1995「山陽道の駅と駅路」『古代交通の考古地理』大明堂
吉本昌弘　1996「古代備前国の駅路と郡衙」『古代交通研究』第５号　古代交通研究会

表2 遺構一覧表

土坑

遺構名	調査区	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面海抜高(m)	調査時遺構名
土坑1	西	楕円形	逆台形	82	(42)	31	16.69	No.1 土坑
土坑2	西	楕円形	逆台形	61	(46)	22	16.77	No.2 土坑
土坑3	西	不整形	不整形	68	(58)	17	16.37	No.3 土坑
土坑4	西	隅丸方形	不整形	95	88	21	16.38	No.4 土坑
土坑5	西	楕円形	逆台形	(72)	54	25	16.27	No.5 土坑
土坑6	西	楕円形	椀形	(110)	74	20	16.32	No.6 土坑

溝

遺構名	調査区	断面形	上端幅(cm)	底面幅(cm)	深さ(cm)	底面海抜高(m)	調査時遺構名	備考
溝1	東	不整逆台形・椀形	123～134	24～82	30～32	15.74	No.2 溝	
溝2	南	椀形	160	40	34	15.06	—	
溝3	南	逆台形	66	16	19	15.30	—	木材出土
溝4	南	椀形	(80)	12	16	15.31	—	

表3 遺物観察表

土器

掲載番号	出土地区	遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調(内面/外面)	残存状況	形態・手法の特徴など
					口径	底径	器高			
1	西区	土坑1	弥生土器	壺or甕	—	—	—	橙/橙	口縁部小片	
2	西区	土坑3	弥生土器	甕	—	—	—	にぶい黄橙/橙	口縁部小片	
3	西区	土坑3	弥生土器	甕	—	—	—	浅黄橙/浅黄橙	口縁部小片	
4	西区	土坑3	弥生土器	高杯	—	—	—	橙/橙	口縁部小片	
5	西区	土坑3	弥生土器	器台	(18.8)	—	(5.8)	にぶい黄橙/にぶい黄橙	口縁部僅か、杯部1/8程	口縁部沈線(鋸歯文？)
6	西区	土坑4	弥生土器	壺	—	(8.0)	(2.8)	浅黄橙/浅黄橙	口縁部1/5程	
7	西区	土坑4	弥生土器	壺	(11.4)	—	(3.9)	灰白/黄灰	口縁部～頸部1/6弱	
8	西区	土坑4	弥生土器	甕	(12.0)	—	(3.1)	明赤褐/橙	口縁部1/6程	
9	西区	土坑4	弥生土器	甕	(11.0)	—	(5.1)	橙/にぶい黄橙	口縁部～肩部1/4程	
10	西区	土坑4	弥生土器	鉢	—	—	—	にぶい黄橙/橙	口縁部小片	
11	西区	土坑4	弥生土器	把手？	—	—	—	橙/にぶい黄橙	把手小片	
12	西区	土坑4	弥生土器	高杯	—	—	—	橙/橙	脚部小片	円形刺突文(貫通せず)
13	西区	土坑4	弥生土器	高杯	—	(14.0)	(3.3)	橙/浅黄橙	脚部1/8以下	三角形(？)透かし
14	西区	土坑4	弥生土器	器台	—	(28.2)	(4.9)	にぶい黄橙/にぶい黄橙	脚部1/8以下	
15	西区	土坑5	弥生土器	壺？	—	—	—	にぶい黄橙/にぶい黄橙	口縁部小片	
16	西区	土坑5	弥生土器	甕	—	—	—	橙/橙	口縁部小片	
17	西区	土坑5	弥生土器	甕	(12.8)	—	(5.7)	にぶい赤褐/橙	口縁部～肩部1/6程	
18	西区	土坑6	弥生土器	壺	(11.0)	—	(3.0)	橙/浅黄橙	口縁部～頸部1/6弱	
19	西区	土坑6	弥生土器	壺or甕	(12.2)	—	(1.6)	にぶい黄橙/にぶい黄橙	口縁部1/8弱	
20	西区	土坑6	弥生土器	甕	(15.0)	—	(2.4)	橙/橙	口縁部1/8弱	
21	西区	土坑6	弥生土器	高杯	—	—	(3.6)	橙/灰黄褐	脚部1/6	
22	西区	土坑6	弥生土器	高杯	—	—	(7.8)	橙/橙	脚柱部1/6程	
23	西区	土坑6	弥生土器	高杯	—	—	—	橙/橙	脚裾部小片	三角形刺突文
24	西区	土坑6	弥生土器	手捏ね土器	—	(5.2)	(2.1)	にぶい橙/にぶい黄橙	底部1/6程	
25	西区	柱穴	弥生土器	壺	(13.0)	—	(5.4)	にぶい黄橙/橙	口縁部～頸部1/6	
26	西区	柱穴	弥生土器	壺	—	—	—	橙/にぶい橙	口縁部小片	
27	西区	柱穴	弥生土器	壺or甕	—	—	—	橙/橙	口縁部小片	
28	西区	柱穴	弥生土器	壺or甕	—	—	—	橙/橙	口縁部小片	
29	西区	柱穴	弥生土器	甕	—	—	—	にぶい黄橙/浅黄橙	口縁部～頸部小片	
30	西区	柱穴	弥生土器	甕	—	—	—	橙/橙	口縁部小片	
31	西区	柱穴	弥生土器	高杯	—	—	—	にぶい黄橙/にぶい橙	口縁部小片	
32	西区	柱穴	弥生土器	高杯	—	(10.5)	(3.0)	橙/橙	脚部1/8程	透かし
33	西区	柱穴	弥生土器	高杯	—	—	—	橙/にぶい橙	脚裾部小片	三角形？透かし
34	西区	柱穴	弥生土器	高杯	—	—	—	にぶい黄橙/にぶい黄橙	脚部小片	透かし
35	西区	柱穴	弥生土器	甕	—	(4.0)	(3.0)	にぶい黄橙/にぶい黄橙	底部～体部1/3程	
36	西区	柱穴	土師器	手捏ね土器	—	—	—	浅黄橙/橙	口縁部～体部小片	
37	西区	柱穴	土師質土器	椀	—	—	—	灰白/灰白	口縁部小片	
38	西区	—	須恵器	杯蓋	—	—	—	灰白/灰白	口縁部小片	内外面に自然釉
39	西区	柱穴	須恵器	杯or椀	—	—	—	灰/灰	口縁部小片	

掲載番号	出土地区	遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調(内面/外面)	残存状況	形態・手法の特徴など
					口径	底径	器高			
40	西区	—	須恵器	甕	—	—	—	灰/灰	口縁部小片	内外面に自然釉
41	東区	溝1	土師器	杯	12.8	9.3	3.4	橙/にぶい黄橙	8割残(口縁部1/4欠)	底部回転ヘラ切り未調整、板目
42	東区	—	弥生土器	壺	(14.2)	—	(3.6)	浅黄橙/浅黄橙	口縁部～頸部1/4程	
43	東区	—	弥生土器	高杯	—	(15.2)	(4.1)	橙/にぶい黄橙	脚部1/8弱	円形刺突文、ヘラガキ文
44	南区	—	弥生土器	壺	(20.0)	—	(5.5)	浅黄橙/浅黄橙	口縁部～頸部1/8	
45	南区	—	弥生土器	甕	(13.3)	—	(2.8)	浅黄橙/浅黄橙	口縁部1/6弱	
46	南区	—	弥生土器	台付鉢	—	(8.6)	(2.1)	浅黄/にぶい黄	脚部1/2程	
47	南区	—	弥生土器	高杯	—	—	—	浅黄橙/浅黄橙	底部小片	三角形透かし(貫通せず)
48	南区	—	弥生土器	器台	—	—	—	灰白/灰白	口縁部小片	口縁部に鋸歯文
49	南区	—	弥生土器	器台	—	27.0	(5.0)	にぶい橙/にぶい黄橙	底部1/12程	
50	南区	—	弥生土器	ミニチュア	(4.2)	—	(2.8)	浅黄橙/にぶい黄橙	口縁部～体部1/4弱	
51	南区	—	土師器	椀	(14.0)	—	(3.1)	橙/にぶい黄橙	口縁部1/6	
52	南区	—	土師器	坩	(10.6)	—	(5.1)	灰黄/橙	口縁部～体部1/6	
53	南区	—	須恵器	杯蓋	(11.6)	—	(3.1)	青灰/灰	口縁部1/5程	
54	南区	—	須恵器	有蓋高杯	(10.0)	(11.7)	(4.8)	灰/青灰	口縁部～高台1/4程	
55	南区	—	須恵器	杯	—	—	—	灰/灰	底部小片	
56	南区	—	須恵器	壺？	—	—	—	灰白/灰	口縁部？小片	クシガキ波状文

鉄製品

掲載番号	出土地区	遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
				長さ	幅	厚さ			
M1	西区	土坑4	刀子？	(54)	14.3	4.5	(13.3)	鉄	木質痕付着
M2	南区	—	不明	(45)	(30.5)	14.0	(17.4)	鉄	

石製品

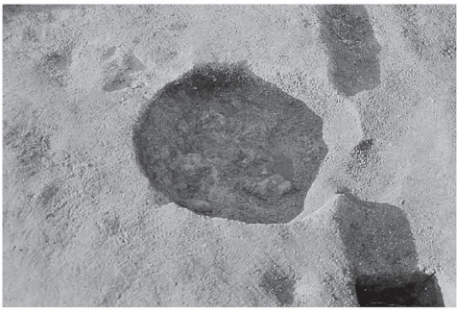
掲載番号	出土地区	遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
				長さ	幅	厚さ			
S1	西区	—	石鏃	(24)	(17.5)	4.0	(1.4)	サヌカイト	

1　西区全景
（東から）

2　土坑 1
（南から）

3　土坑 3
（南から）

図版２



1　土坑４
（南から）

2　土坑５・６
（南から）

3　東区全景
（東から）

1　溝１
（南から）

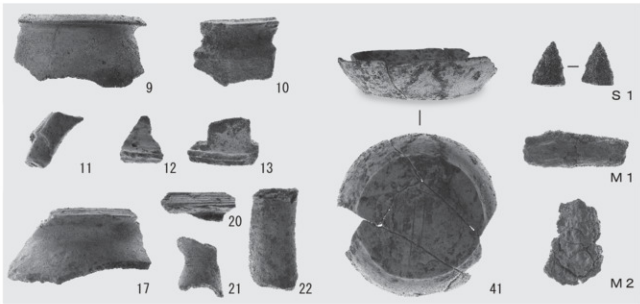
2　南区全景
（南から）

3　溝２・３
（北西から）

図版４

１　溝３　木材検出状況
（西から）

２　溝４
（西から）



３　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おおいけじりいせき
書名	大池尻遺跡
副書名	河本土地区画整理事業に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	赤磐市文化財調査報告
シリーズ番号	10
編著者名	畑地ひとみ
編集機関	岡山県赤磐市教育委員会
所在地	〒709-0816　岡山県赤磐市下市337　ＴＥＬ086-955-0710　ＦＡＸ086-955-0758
発行機関	岡山県赤磐市教育委員会
所在地	〒709-0816　岡山県赤磐市下市337　ＴＥＬ086-955-0710　ＦＡＸ086-955-0758
発行年月日	2017年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
大池尻遺跡（おおいけじりいせき）	岡山県赤磐市河本（こうもと）551-2番地ほか	33213	333220359	34° 44′ 49″	134° 0′ 44″	20141014 ～ 20141219	188.5	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大池尻遺跡	集落	弥生	土坑6、柱穴	弥生土器、 石製品、鉄製品	
		古代～中世	溝4、柱穴	弥生土器、土師器、土師質土器、須恵器	

要約

遺跡は東高月丘陵の南東斜面に位置する。耕作地の造成による土地改変を受けているものの、調査の状況から、南東向き緩斜面上から谷の周縁まで遺跡が広がっていたものと考えられる。確認した遺構は、主に弥生時代後期の土坑で、古代の溝と柱穴も確認した。
また、谷を挟んで南側では、東西に延びる時期不明の溝3条と、その溝の間に形成された平坦面を検出した。古代山陽道が通っていた可能性も考えられるが、遺構として確認はできなかった。

赤磐市文化財調査報告　第10集

大 池 尻 遺 跡

河本土地区画整理事業に伴う発掘調査

平成29年２月15日　印刷
平成29年２月28日　発行

編集・発行　岡山県赤磐市教育委員会
岡山県赤磐市下市337

印　　刷　山陽印刷株式会社
岡山県岡山市北区富吉3098-1